吟草拾

二編

下

へ13
2928
6

門へ13
2928
巻 6

昭和九年七月十八日
購求

桐房以登家内喜巻之六

江戸

爲永春水著

第十一回

東京市立図書館蔵

新話

変ちう言りて居ても後ろ先老実の
ない分の用で始めおやうーのごとト言ひ
と市ヲ一ぷく喫み和もまこ一ぷくおやう
そも言ハうんぢうけみ丈ちうて お奈も 後ろんぢ 恨悪
とし 成ヨ 岩ない 孫ヲ 落ちて 相撲 セして 英八ヲ ちゃ

ゑひとうのうちへよりてこうふお茶でもとらんと
帰るぶらふと差懸て礼まゝ繋を揚ゐる火鉢の
傍へ安居　市　今見た例の似合ひとうもの後帰上
さんが礼繋て居るのゝ　ヤ居ごゝ　仙宝早者ども
苦労がめりたゝ　仕ゑひョ　ゑゝ今自分ハ亦病ゝ痛くて
今まで森ところんで居たけ是ども　御女ゝ湯屋へとゝら
へて居ようまで　御ゝ起てまゝ　ゑゝ洗ハゑひのごめう
撫れまゝてきたゑひョ　市　ナニサ　礼まで居ると言ごとてまゝ

ゑひとうのうちへよりてこうふ例もひど清兵衛ゑひと言
のかまゝ　隠ゝ兵衛　ゑゝ　ゑゝ　礼ゝ　ゑゝ
御で紙のか　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　御ゝ　ゑゝ　ゑゝ
逃て居ふゝ　脇でもまゝ上まゝ　市　ゑゝ　ゑゝ
有ごまゝ　ヤ　晴ゝまゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
今ゑ御女ゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ相談ゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
過ゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ

そんと宮早来るものごが　ヨヤ　ゆご　市へ　ゑ今来る
ろでめし　跳てこうめごめろうゑ　よへそんえ入トのふろもく
格子戸をあけて　仕出ハイ　ゆ見成まし　市ぎんハ　ハイ
おいろまろまして　先刻ろう　お待ねサト　陸よを明る　ヘヨヤ
市ぎんの　縄方ご　左様中まして　ひの頃ハ　今日　強まし　うで
おごろまして　うふ上りて　ゆ焼ごて　ゑまし　ト　酒肴ごまて
帰りゆく

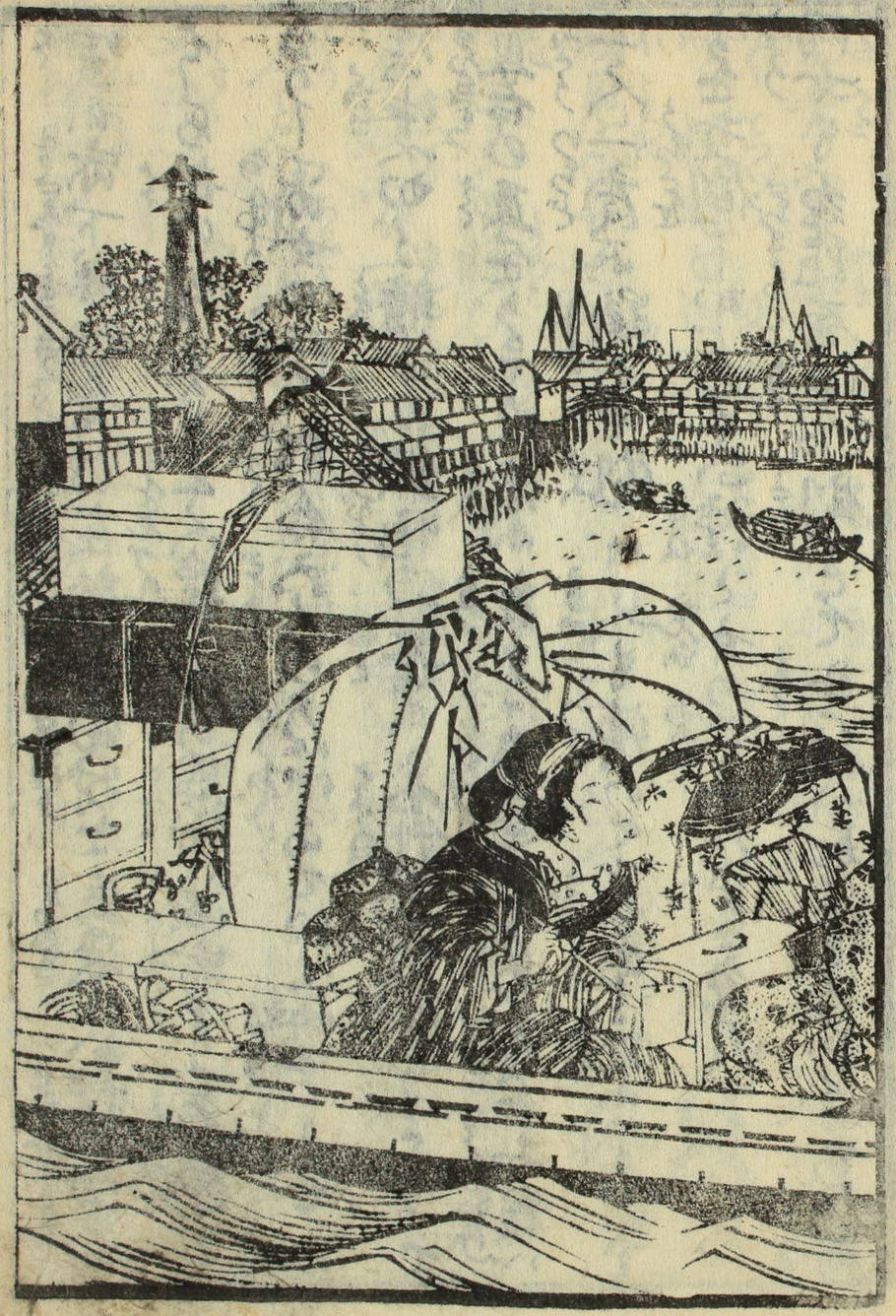
ごまろう　市へ　ろ人　場ごれ　ろう　稲まみの　荷物ごまろう人

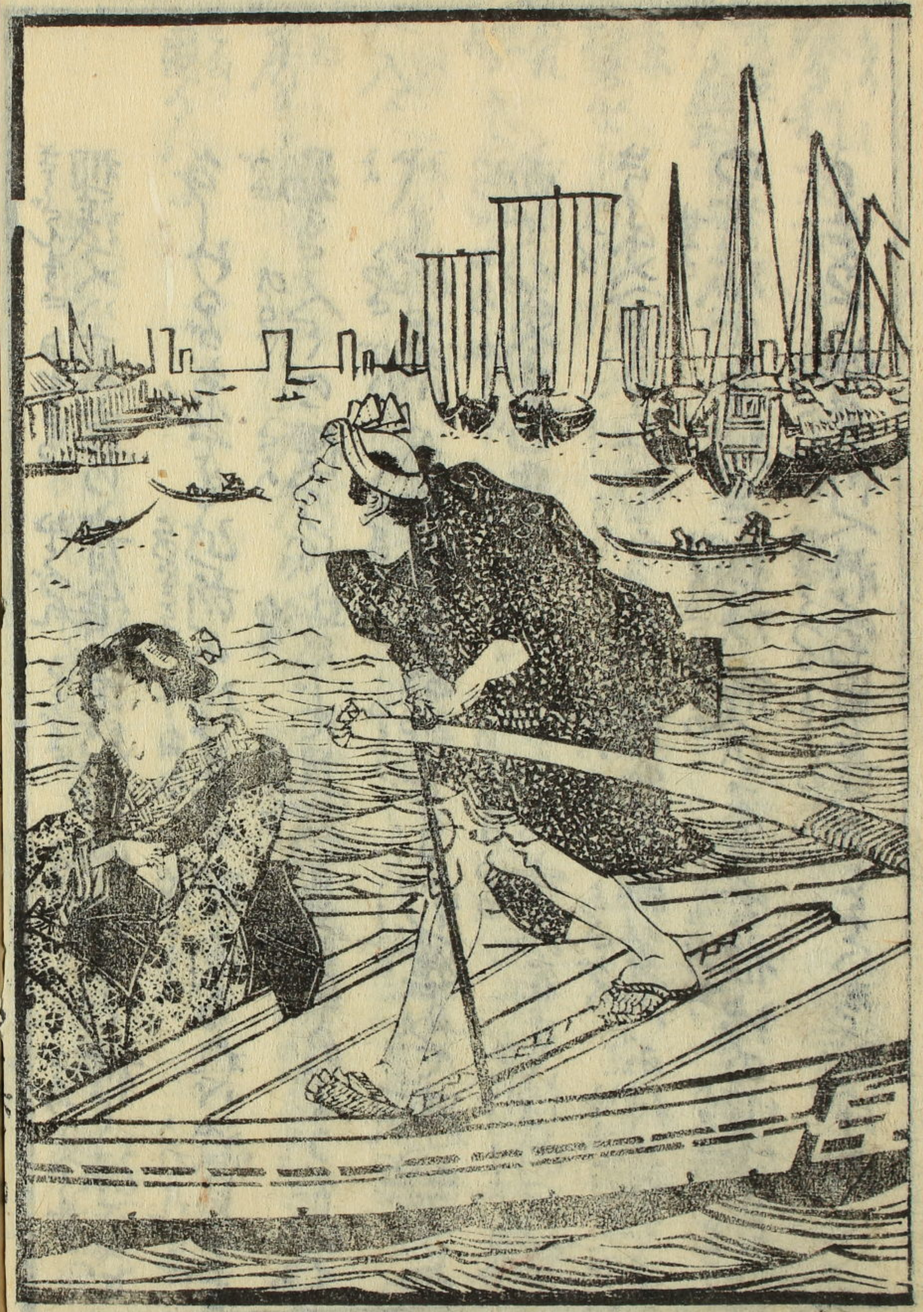
同の　ゆ　もして　春ごめる
市へ　お茶の　場様の　悪ハ　所へ　来て　春こふ　空気の　毒ごご　活悪
ごして　お茶　成　千代つよ　お茶の　相淡　ごご　春ごめごら　ろうと
同や　せうトのへ　お　ち代も　ゆ見　相ようく　相ようみ　ろうて　居る
所へ　ゆ文の　お清へ　憂ゆろう　ハイ　ゆ今　帰ろまして　ヘヨヤ
清へ　早ろまへ　ゆ　ゆ　ハイ　ゆ見　ゆ　ハイ　ゆ見　ゆ吉
外ごで　おごろまして　ト　言ごめごら　中の　ろへ　這入る　ヘヨヤ
腰しのの　大きふ　ゆ　ゆ吉　ゆ　市へ　ゆ所へ　行ごめごへ　ハイ

摩利支天さまへ参りまして市へ出ますと四五人サワ〳〵
と盗やらうなど捕へハイあります御へ婦人まんと表へ
出ますを捨てを明る　お柳さん洞穴よりて市ぶん
安うら直ふかぶく　御へ引ちく左様でおざいます〳〵と奥
へ入り御へ〳〵ア〳〵毛児様へ機嫌よくまご性来よ御ねんで
居ますヨ　御へ〳〵その方が能ヨ　亦お人参てうきまふされて
居るよ

トあまてうか御も相変わらず　酒のうるぐら　特宅の

相続又ハ直吉の責債家財の内ばなど稼ぎ浮世
のうしけるが義ともひ所ハ住居て面倒うれば彼ものを
ぶき人くの便り仮宅で日数を費やたうもおか
ばい婦女川ハ再勤しお柳ともも彩麗わて連出ると
新そ仮文文の業ものぐ〳〵えまま市ハ弟も住所を
きくぐ〳〵ハきの良のよるれば諸者ハ婦女川ハ住居ものの
の業法をもんべき相続　紙ひ屋ごて彼地の仮家居
のもめて婦女川へ仮宅用意をとたハ考ケる





家内亦下徳佐倉の在所、柳田村を立退し、お種真吉を
ともなひ、中の藏の藏宿より乃連と
ゆう一男女の二人、都合五人の乃ぢめていと賑〳〵しく
原中へかゝる時、鉄炮の音ハ未だひびきうて
真吉の耳をうつより先ハ、そうの乃連の四方の肩をすり抜バ
二人一度ハ驚き、倒れ又も壊のそ落る玉ハ母のあるを
よけ倒れ〳〵おそろしくお種と女のうをひきうばれてまゐりけゝ
両女ハ原中へ倒れそ、死ハ、まぐうけるまの時

北の方なる山の藏の林の中より顕れ出る二人の曲者
各〳〵抜鉄炮を引提て走来り
顔見合せて、先の方なる娘二人の手癖ハ
倒れ〳〵を呼び　どめざ行貫尾ぶぜ「さまべサ邪
ケ名奴ぶぐ二人一度ハ寂滅こハ乃ぶて人手癖ハ乃女ぶ
二人こハ通頂、稀なる大仕合　サテ男〳〵のうろのぢ立退
支度を仕損しなア、ねんの　ヲ〳〵合点ぶ〳〵二人ハ鉄炮投
捨細俵をとり出し、無んで倒れ〳〵女の手を引起さん

立ちまとび お櫃ハ手ニ持 泥棒を一人の女ハ引起を人ハ
引まて起上り 恋ハ まつ紙たるなさぬふ男の猫ハ一拳
ヲイと當る 長煙の働きハ お櫃をちらハ一男をも花うく
つ〻ハ倒し 多花両賊を縛り上 草ひらの中へ蹴付る
扨て男と直吉をハ花〻美をあ〻のうつ〻ハ お櫃ハ婦さ
ぶろしきハ懐中のおく〻ハ ハ のあつ〻よを抱起して
見まとびぎんや 猫えをハ接まとる 即紀の大変女と性よ
稚〻と ハ當をきれども ハ櫃生ぐきまぐもみく

途方ハ人まて驚きしゞ 直吉ハ只筒 貴ハ おぐろきれた
うゝひとる変うまとび女の多花を得て遠ハ ハ
うりおろよの変紀を悔わぐも 途方ハく 彼女の連れの
男ハ病身うるうハ浜花 病をうけて ハ見まつげうう
けまとび女と相浜して力を食せ 二度以来の宿人 意ハうて
寝のおすひきを 抱帰り 彼盗賊ハ 宿役人ハ 引てり
ぎうまう。 ぎの司の聴訴の役元へ美ー ハ つ〻の紀賊ハ
其宿の寺ハ 葬式をしうの〻て 埋め連の男の病所の治

まを宿家に遍歩し　此男女も都へ登らんとうけまとこと
又の力と頼合宿仕人にも　相愛の後を送り安堵せ宿を
ぞ旅立けり

作者曰此所のつゝもなくくしてうろく一像のごとく
うらぶとあるまじきも　あるまうに解つゞけて山道のあく
なりて人情本の浮世草子の風を　文とうまとぶこと
わふまをあるべのくく
亦あくに各をわくまぐる女が男とも不互　物をして

二人の賊を捕押へ　るのくまをぶ最初の浮世草子
宝記にて盗賊に面部をさせて　偽りの寄せ側
なる戈智合ご女にまれるるゆたしてあめやしに者と
りくべくそに浸くに　説綿く　像りをよくて看官の
面ぞ汎ふせるべく

第十二回

学問　名に習ふ道のべの露の命は　盟日　消るとすと　海三
芝八　相沢氏の女　女が　舞き　服者の　門側　仕ふ　行る　石　名

あり無や人々の名をやうやうげ髪〜保つく他の教訓を受
るなりとる変はやうど彩るうるわき墨紙でも絵く仏を
分てよくうるタ人バ祇教訓とうるがどうし貝況法全の有教
客よう〜難波の西堀の川岸ふ徜徉辻君の年まうぐ潮く
二十歳の上ハ二案う三歳ふうるうるうるぬ人ふそうき女めうけう
此程此所ふ立出て露けき草の庵さん稼きはをつ〜ま
ちくも信まそうこ〜祇花会とうき活業ハ進うふ
まる而たうるう同じ苦界ふ為を捨うバ何の所の廓ふまむ

とそ松の侵の方変獄二人下らぬ今盗の人と共猟
せうべをを奏ふうるいうふの竹の流るの末うも横うふ潜
つて義さん勝うる此所の堀ふ立ちとそ横ひまわうべ
不審思ふぬ人もあうしが或時来うる一個の男為て別
侵のまうけん彼辻君ふ近身寄何う厚き仕ひつ仕業を
ふぬ一軒の料理今亭の二階ふ登う酒と肴を誂て酒
時楽し心酒宴の間ふ男ハ膝を寄男ハ膝を賜さん涙
昭日今日初已ふうて別く来と男の歳が遣ハ

気位で他の弱義を察時は是非に不拘助力をうて進退
度常住の合形で他人は依てはいかぶる業活ごと弟の方が
多くわるものとかつてのよのごが戸お茶の容儀の先羅臭を
持ぐらい仏故姿形は仏合はあひ賤しひ勤をするのごと賤侵
あひ理富でわらはけまで他の身を仕せる程うぶ仏振ふも
意気を考え織ふもおるうんふもうまるを話を不顧ふ西堀
めうりの辻君ふ陽り晴しひ業でうひく人名保を周深を
妻しくふ言ふ感弱ひ理もわらふぐ根宮をまるふ是ふ

とすぎ
るりるるあふと風ようも即ち産お茶の仏産弁で不貌なふ
私がお世話をして不自由のこ事振ふ世事をさせて上家ぐまれ
でふ部で速或うまト亟を意生の可ふ実意を告て内ふ衰
墓の晴をふくくうぐら暇顔の色ふ最深く恨と男の信ふを
尽して着せる世嬉しひと思ふ不ふ夢ふ知ふねども差入ふ事の
空の月照とふ差ふ意ふ知ふ
處女ふふのとごとそふ自然備ふ花の顔色ふ醜顔の毛数
うるふしく雑女の不宜ふも這お賤を以て弟一と信を分ね

めへわくごと思うく世の風情めそ唯高くやうの着へけるぶ男の
新ふさ〜傍きて　参へ　宮ふ口信ゆめ乃ぐ〜へ存ぜまたが落
命で仕様ふ和〜ひ臭ふ成果まうとうト言ひうけて涙ふ
壹手形うう形下うう仕来の表ム

「ヨても此臭ハ野へ出しと記録とやら和をさてうして
仕甲巡文も遠てうくくれ文帰中せめて男人言解の
探ぐうの臭の代を見繕の乃ふと仕事る
男へイヤモシお職さん新ハ臭下してあうしの職しの臭の人ぐと

脇んでお言ひ合まうけまど仕古ううして世の中ハ浮沈ハ
誰臭の上ものうるでお新一個手形の和〜ぐうて世ま
世うふ頭の臭ひ様ふ面目ぐうる乃屋もうひのサ〜ぐり和ふ
行て職しの勤めを仕成ても錦の家ふ卯人ふ勝る幼の
お新ぐ思ひ出ぐ和の宮意伝章お新も汲うけて臭を
宮うう気ふうて新りを折明う様ハ出来ひうふ。イヤ保
新言のハ此男の自慢新の方ハ當時まぐふ浮く言ハ
ちと意流なお人ぐのハも系ふ折角機嫌をよく抜んで居る

めを行所まで送寄て居ごろを長屋の頼母ハ不粋な
事ばかりく今歌ハ混ぐさ物でもない気長ハ返りのなぜまを
ト言ひく又も盃をさらり押つせ中のお職ハ次人を出て小男場
の方へ行けるを手後再度座敷へ来ぶ時刻うつまぶ客ハ客
女郎亭の者を呼迎付男へイヤ女中さん今小用ゆゑ連の
女ハ御張あるまいこと呼んでお呉なるなら　幸ヘヤ達の女中へ
言ひ伝ふ成まいこと　二重時こまを半客人上て居ると
行作まいこと下座敷の位置で遊ぶまれて居ます

世のこと人入乱一度成とさ一世せば男ハあまりとしかの女
て男ハハテ　地走の様ハ言ふもいこと面白ものと行こなるの
合点の取行ト言ふ殘一ぐらい面白ること紙と情着れば
迷惑ぐの駄人持ぐき取ぶ表ハ白無の縫強中人
本金の色絵宿の様紙ゆゑ何でも知ること番屋
紙ようまこ様ハ思ふれどうこう番頭へぬ蘭者使いぐ
ゆーき女の素生そも仙人の二零落て辻者とまでいうこぶ
ぶーぐ言まこと何世の盛衰を横目見ゆゑ成のめと

火の許へ彼草紙の中せまりて付録書にて挿みたる辞世にて

ちるならく峯はなれゆくにちる花かな

実なき世に恋はまぞさびし

と記せし一首の意は、彼女男ハいよ〳〵彼が親のところの庵の暮し、胸迫るやうなるつゞきばかりにその夜は又まいに西瓜の浮へも尋ねかね、なく思ひ続けて寝をまく、髪もなく濡ていくらぬ草枕、露の命のおしき恋の恥しき勤をきる身ぞと、ちるかまき所為そろちあり

真の情ハなく〳〵にゆかりしあと終に此地に沈く果たり、かく契りてある夫も情人のあるやらん、情もあるまじく誠の美女に千君辻君の業ハまことにとも又郎に身をよせくるるにぞて、限もなきよの中に浪文見た人の所存なる事ハ老も有も、あはれ此度なる波に二個とあらぬるれぞ其身をうき実の美人とのべてへゞ、彼辻君に限りて遠くも義を聞、縁を思ひ桜を帰り道く義の如くにぞ

春水伏申几此趣ハ世にあらし実説を以て

元禄とかの側の人情本とかずゝく遠ひて文
章を考へ俚言をつゞうふあらう且男女の情態
好色の場を描く極人用心し手真情をはくゝた
貞操と節義に迫る女の用心と言ひて第八貴
客の心の浅深に応て情の厚薄を発明し
初の意を知る使ともに可成さへ嬉うれ
るの一人性本の初く情態と自然あるさわゞ意
義の限りのうゝ猶ぬと看の男女遊さるゝ

祝ゝ心をつけて漢解うるふべ初て手情合の初やう
なる面白きの言葉を知るべし

まゝどろきぬう人ゝ人を見つゝうる正ゝうゝん春の夜の
美人と泳ぜゝ哥の心ゆゝ遠人ど衰春の源情ハ美現のうえ
別もうゝ意しき人の姿のゝ眼ふきゝ人ぎうて言ゝ思男ふ
仇なる江系ハ七ずゞ三解う時るけ三ハ源遊ひの雪国
て風貞欲の心者と舞ね近年彼男丈と見るとうを傳て
男ゝゝお職さん今夜ハ二三度まで見ゝうゞ心ゝ様ゝもゝ人

あきうひ故義家も行房をしたして流の化をまことうで
ありしこのサ　ヲヽヲヤ　見ぬさるぬやおぞうあまたう入う者ぬか
宮へどさうあまたのふ　お尋ね　成て　ちとく
ふ行るへ　程めうぐうへ　存ぬまた　男へアヤあぐさいう遊歳う
ぬくうハが　宮めて　怒様　所ぬぐうふと　ぬやーおも　物ぐうふの
信ぬサ　ふ保護へ　様でも　山の様へ　幾年も　遠へ　ひとつへ
ているるふ　手程ふ　私が　学活をし　上寝とも　言ぬまひ
サうくーまう様ふうへ　意も　解ぬうぐうの　場義上　ぬくーう

ぬて宮ひ　夜風ふ　吹まて　居ぬ　感　あうへふひ　今ぬ歌の　動へ
私が　持ぬ　ぬふし　てふうまう　ぬ所へ　ぬふし　てぬ　ぬぐうや
せうをして　気　散しふ　酒でも　天ぬて　ふ帰ん　ぬ感ト　辞退せ
ぬうぬ　ぬ　ぬ　ぬふの　浮草　めふ　世のぬうぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　連立　路へ　西堀の　西へ　ぬ月　暮ぬうぬ　ぬ
ぬぐうきうの　男ひ　義理と　様めーの　二ぬう　ぬ別めう
第　ぬとして　様ぐうぬうめうやうん　ぬぐへ　人情の　道理へ
ぬうぬ　ぬうぬ　宮の　様の　人情ふ　通ぬうぬ　ぬ弟ぬうぬ

ぶく　四を明ける通家ハ他の　　所のを〜七時七立
せるなり　れハ陸ど　都て　者の　　孫ゆ　て　へ　ゆきを　不
便ゆも　表をゆも　思ひ　情をうけらく　ものぞう〜　愛　ところ
諭ゆて　勿体　ゆきるものぐら　背南都の　東園堂の　まくゆ
わく〜　八宝　様ハ　天ゆ　知らまくる　落花　ゆけまば　興福
寺の　別當ゆ　作せらまて　禁庭へ　移し　らくあらんとゆ
樽まる　詞ゆく　千本を　堀ま　事ゆ　裁て　院ゆ　大内へ　きし　上んと
せくわく　真福寺の　伝法　ものを　立後て　りゆ　上り

作ゆ　ものくまゆ　寺の　霊本を　外へ　移ると　存ずもようぶ
羅ゆ　行らくくも　大内へ　存ずもと　不法の　様をゆ　ゆる
女院ハ　あまを　周て　実も　侵達の　服まもくも
殺ゆ　木の　陰ら　竹の　枝のゆ　おくき　身ゆ　存ずぐら　撮花を　惜
見流の　ゆ　ゆく　強しき　所ゆ　ゆるのれば　ま　侵寺ゆ　ゆ　ゆ
伊賀国　余野庄　を　養の　料ゆ　ゆる　り　春毎ゆ　花の
堀ゆ　て　役人を　付守せらる　そまう　浦　余野庄を　花
墻の　庄　とゆ　りそぎ

彼女院の男子の如く勾引かどわかし屋敷へ連れ来る
人々のべ〳〵我身を忘れて他の痛さを知らず人達ダ人情ふ
行儀ろ早合点ろう
支へさてあき彼男ハか職を停られ途中もかろうやぐさろ
山〳〵のぐらう又も料理屋ろ連のこう以来のおろ〳〵稽〳〵ふ
実ろとうろうい出流ようろ〳〵ふ物時〳〵ろ手を遊ぶりて
野〳〵ふ一筋の分わりて分後西郷の海岸ハ不及難儀
の出流ふ伴を見るろ終てうろ〳〵ろ

見此一冊ハ初編ようあるその後下ろ彫
ふ越向をまらつけるる板ふ男ひるんが結ハ直
さる十三回十四回をようく〳〵る人ハ実ふ左様ふそわろる
ろ思ふ合をようつぎ物語みそろとおくせるべ

同房新話以登家内喜巻之六了

門人　春江
春笑　授合

江戸　狂訓亭　爲永春水戯作

江戸　一筆庵　溪斎英泉画圖

春暁八幡佳年始遺辰巳乃梅　全本十二冊　爲永作　出來

河野名臣十八森　全本二十五冊　爲永春水作　出來近刻

書物小説　問屋　江戸馬喰町四丁目　金幸堂　菊屋幸三郎版